

幼稚園の保護者会主催行事に対する成員の意味付けの変遷

：保護者会報誌のバザーに関する記述から

境愛一郎 (共立女子大学)

栗原啓祥 (清心幼稚園)

1. 問題と目的

保育施設において、保護者は一方的な「被支援者」ではなく、子どもを「共に育て合う」主体にして、保育コミュニティの共同形成者となり得る存在であり(島津, 2016)、園の文化や実践の構築に関わる重要な成員として位置づけられる。保護者がそうした主体性を発揮するうえで、基盤といえるものが保護者会やPTAに代表される保護者組織である。厳密には、保護者会とPTAは性質が異なる組織であるが、保護者らが参加し、行事等の補助・運営、園や関係各所に対する意思表示などを行う点は共通する。これまでに、園と共同で助成金獲得運動を行う(脇本, 2006)、行事の主催や機関誌を発行するなど(北浦・重田, 2004)、数多くの活動事例が報告されている。また、保護者を園の文化的成員としてエンパワーメントし(島津, 2016)、子育てで不安の共有および軽減にも寄与する(田丸, 2012)ことがわかっている。

一方で、保護者組織については、加入の任意性、ジェンダー格差、過度な負担などを巡り論争が絶えない(森村, 2019)。実労働力を女性に依存してきた傾向(竹尾・神野, 2016)に鑑みても、現代の社会構造、価値観との齟齬が生じていることは明らかである。保育施設においても、運営上のトラブル、仕事との両立困難、活動目的の不透明化といった要因から組織の解散に至る例が生じており、入会特典の明文化等の対策が必要であるといった報告がみられる(鶴谷, 2012)。以上を踏まえると、現状の保護者組織は、社会や地域、保育の変容と向き合い、葛藤や試行錯誤を経て形作られたものといえる。したがって、その変遷を理解することは、ローカルな視点で保育の潮流を解明することに直結すると同時に、今後の保育コミュニティの運営に対する示唆をもたらす可能性がある。

保護者組織の変遷に関する研究としては、キリスト教主義幼稚園の「母の会」について分析した佐藤(2010, 2022)があげられる。佐藤は、園長ノートから大正末期～昭和初期に至る会の動向を整理している(佐藤, 2022)。また、1960年代に園・教会の資金集めのため

に開催されたバザー(保護者会活動)が、保護者負担の増加などを受け、フェスティバルと形を変えて存続している経緯とともに、当行事が保護者の成長を促している点を指摘している。ただし、両研究は、行事の変遷に関しては沿革的な説明に留まるとともに、園長や会の中心的立場にあった保護者の記録・語りに依拠するため、組織としての試行錯誤の様相、その結果としてのスタンスの変容等を捉えるには至っていない。

本研究の目的は、清心幼稚園の保護者組織「幸の会」が会員向けに発刊する機関誌に着目し、創刊(1983.11)から今日に至るまでのバザーに関する記述を分析することで、保護者会主催行事に対する成員の意味付けの変遷を明らかにすることである。会報誌という性質上、発信側と受け手側の双方にとって必要性、納得性の高い内容が記述される傾向が強く、当時の価値観や情勢についてより俯瞰的に解明できると考えられる。

2. 対象と方法

(1) 研究対象について

①清心幼稚園「幸の会」と機関誌「藤棚の下で」

同園の記録上最も古い保護者組織は、1898年ごろから家庭生活や児童福祉について毎月話をしてきた「母の会」である。その後、学校法人化を機に(1969.3)、「幸の会」が設立されている(1971.4)。現在は在園児父母と幼稚園職員で組織し、キリスト教主義の幼児教育振興を図ることを目的に、清心フェスティバル、慈善活動、園行事のサポート、機関誌「藤棚の下で」の発行等を行なっている。機関誌は、会員が広く園での生活や「幸の会」の活動を知るための広報、並びに「幸の会」の記録・継承のため、1983年に創刊された。

②清心幼稚園のバザー(現・清心フェスティバル)

第1回のバザーは、1970年に開催された。その目的は園舎大ホールの下床改修の調達であり、半ば園が保護者らに依頼する形で地域住民に手作り品等の販売を行った。以降、隔年で開催される「幸の会」主催行事として定着し、「愛と真心と奉仕」の精神のもと、バザー売り上げの半分は園に寄付、もう半分は「幸の会」および各種サークルの運営資金として活用されている。

1994年に現在の「清心フェスティバル」に改称された。

(2) データ収集と分析の方法

創刊号(1983.11)から90号(2021.3)に掲載された内容のうち、バザーに言及した記事を抽出し(全53件)、記事の著者、タイトル、種類、行事に対する価値観を読み取れる記述の抜粋を一覧表化した。以上のバザーに関する記述を、園および「幸の会」の沿革史と照らし合わせつつ読み解くことで、当該行事に対する意味付けの変遷を段階的に整理する。なお、園の沿革史は主に90周年史、110周年史を参照した。

3. 結果と考察

バザーの変遷は、4期に整理できた。以下では、各期の特徴や背景を、会報の引用を交えて検討する。

(1) 主要行事としての集約と歪み(1983～1992)

同期間では、バザーが会の中心的活動として置かれ、会報を通して独自性や意義が説明され、積極的かつ献身的な参加が呼びかけられている。創刊号(1983.11)では、創刊挨拶に続き「バザーについて」が掲載され、「お母様方全員の心からの協力で成り立つ」という前提が強調されている。また、バザー直前に発行された第7号(1986.7)では、会長、前会長らが寄稿し、全7記事に渡る参加の呼びかけや準備経過報告がなされ、尽力する母親の姿が称賛されている。バザー直前の号で、熱心な価値づけと参加呼びかけがなされる傾向は第12号(1988)頃まで継続する。一方、第8巻(1986.12)からは、過度な負担や内容のマンネリ化、収益金の使途に対する不透明感など、バザーへの不満に触れた記事も散見されるようになる。第17号(1990.7)では、全員に参加を呼びかけつつも「バザーをエンジョイ！」と題し、「あまり無理のない形で」と前置きしており、負担の声に歩み寄りざるを得ない状況が読み取れる。

(2) 子どもも保護者も楽しめる行事へ(1993～2001)

(1)末期より、バザーを大々的に取り上げた記事は減少する。この背景には、雑誌の編集方針の転換、園創立100周年行事(1995)の準備・実施とも関連した保護者の関心の分散が考えられる。バザー自体も、手作り品を製作・販売し、外部の参加者から売り上げを得るものから、園の子どもや保護者が楽しむフェスティバルへと方針転換された。28号(1995.3)の振り返りでは、自らが参加者として行事を楽しめたという体験談、収益金を園のオーディオ購入に充てたことなどが紹介され、行事の宛先がより内向きに変化したことが読み取れる。また、(1)期のような会長の寄稿より、各出展サークルの記事が目立つようになっており、サークルの活動目標としての行事という構図があらわれている。

(3) 存在意義と持続可能なあり方の模索(2002～2013)

2004年は、園舎の新築、定員数削減、「幸の会」会費徴収開始など大きな変革が生じた。直前2002年度フェスティバルは、改築の話題が誌面を占め、会報での扱いは写真1枚に留まる(第48号, 2003.3)。変革を受けてか、第57号(2006.7)では、フェスティバル特集と題して、4頁におよぶバザーの歴史や意義の再確認が行われた。以降、開催年(2008, 2010, 2012)の7月発行号では、第1回バザーと「愛と真心と奉仕」の精神に回帰することで、現状におけるバザーの存在理由の説明が試みられている。他方、人員の減少等は深刻であり、2008年度以降は食堂コーナーを外部委託する、その交渉を一部園側に委ねるなど、「幸の会」独力で運営される行事とは異なる様相を呈してくる。

(4) 共催イベントとしてのフェスティバル(2014～)

園側を交えた協議の結果、2014年度からは園との共催になり、地元アーティストのワークショップやキッチンカーの出店、児童遊園との連携など園行事、地域行事としての色合いを強めていく。2014年度開催後の第78号(2015.3)以降では、フルカラーの会場マップと共にアーティストら活動が大きく報じられており、「幸の会」単独の行事ということよりも、イベントとしての盛り上がりによって価値が置かれていることがわかる。

4. 総合考察

保護者会主催行事は、内外から問い直しが迫られるたびに新たな意味付けが行われ、各時期の成員にとって納得性の高い形態に変容していると考えられる。保護者会報誌はそうした過程を追跡する媒体となり得る。

主な引用文献

- 森村繁晴(2019) PTA 親会員の不満とその要因構造に関する研究。放送大学審査学位論文(博士)。
- 佐藤浩代(2010) 教会付属幼稚園の保護者会活動と母親の育ちについての考察: 教会付属幼稚園がケアリング・コミュニティとして機能する可能性。東洋英和大学院紀要, 6, 49-70。
- 佐藤浩代(2022) 戦前期の東洋英和幼稚園における初期母の会活動: 母の会記録ノートの検討を中心に。東洋英和大学院紀要, 18, 51-68。
- 島津礼子(2016) 保護者と保育者の協同的な学び: 認定こども園における保護者会の事例から。保育学研究 54(3), 32-42。
- 田丸尚美(2012) 幼稚園への入園が子育てにもたらすもの: 幼稚園保護者会による「子育てトーク」の実践から。福山市立女子短期大学紀要, 39, 55-60。
- 鶴谷圭一(2006) 幼稚園の現場から: どうする保護者会?。対人援助学マガジン, 8, 83-89。